様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３８５５

研究課題名（和文）日米豪における〈男らしさ〉規範の比較社会学――男性性の文化基盤の解明

研究課題名（英文）Comparative Sociology of Masculinity Norms in Japan, the U.S., and Australia: Elucidating the Cultural Foundations of Masculinity

研究代表者
齋藤　圭介（SAITO, KESUKE）

岡山大学・社会文化科学学域・准教授

研究者番号：６０７６１５５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、とくに文化的要因である〈男らしさ規範〉に着目し、日本の男性のワークライフバランスに対する意識とその実態を、日米豪の比較研究から明らかにすることを目的とした。本研究は、〈男らしさ規範〉の揺らぎを研究対象とし、統計資料から非主流の働き方をしている男性の実態把握を目指すとともに、当事者へのヒアリングと質問紙調査を実施することで、米豪を比較対照にし、日本の〈男らしさ規範〉の特徴を意識と実態の両面から比較社会学の手法で析出した。その結果、日本の〈男らしさ規範〉はとくにワークライフバランスの観点からいえば、ここ10年で大きく変化していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
男女共同参画社会は、男性の働き方も検討の対象に含めることで、さらに男女平等な社会の実現に向けて飛躍を遂げることができる。そのさい、現代日本の〈男らしさ規範〉がいかなるものかを国際比較を通して明らかにすることは、喫緊の求められる作業である。
本研究は、日本社会に固有の〈男らしさ規範〉という視座から、男性のワークライフバランスを考察することで、日本において進行する喫緊の課題である（晩婚化や非婚化などを含む）少子高齢化の歴史社会学的背景を明らかにすることができた。また、〈男らしさ規範〉は、男性のライフコースを規定し、ワークライフバランスにもっとも強い影響を与える要因の1つであることも明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the cultural factor of "masculinity norms. This study will also clarify Japanese men's awareness of work-life balance and its reality through a comparative study of Japan, the U.S., and Australia. This study will focus on the fluctuation of " masculinity norms. To this end, we will use statistical data to understand the actual situation of men who work in non-mainstream work styles. In addition, interviews and a questionnaire survey will be conducted with the men concerned. By comparing and contrasting the U.S. and Australia, we will analyze the characteristics of Japanese "masculinity norms" in terms of awareness and reality using the methods of comparative sociology. The results show that Japanese masculinity norms have changed significantly over the past decade, especially regarding work-life balance.

研究分野：社会学

キーワード：ジェンダー規範　男性性　マスキュリニティ　ワークライフバランス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

男性の働き方を変えることなしには、喫緊の課題である男女共同参画社会の実現や高齢化社会への社会的な対応は困難である。程度の差はあれ、男性は〈男らしさ規範〉を内在化し、自発的にワークライフバランスを崩す働き方をしがちであるといわれる。この観点から、本研究がとくに調査対象として取り上げるのが、日本に加え、マッチョイズムに代表される〈男らしさ規範〉が根強くあると指摘されているアメリカ（米）と、男性運動・研究で世界的に議論を牽引しているオーストラリア（豪）の 3 か国である。

日本では、内閣府が平成 13 年から刊行している『男女共同参画白書』において、女性の活躍という視点が重視され、同施策は女性を中心に推進されてきた。しかし、女性の働き方への着目から男女共同参画社会を目指す動きは、男性の働き方を大きく変えることにはつながらず、結局は家庭の仕事に加えて職場の仕事を女性に増やしただけだと批判されることがある。

そこで、男性の働き方の変容が必要であるという考え方が注目されはじめ、平成 26 年の同白書のなかで初めて男性の働き方が特集された。男性のワークライフバランスを規定している要因の 1 つが、〈男らしさ規範〉だといわれており、〈男らしさ規範〉についての実態の解明が、男女共同参画社会の実現のためには差し迫って必要な作業となっている。なぜなら〈男らしさ〉規範の実態を明らかにすることで、様々な社会問題を解決する糸口になると見込まれているからだ。

日本の〈男らしさ規範〉を考察するさい、先行研究では、とくに国際比較を通してその特徴を析出しようとする試みがなされてきた。例えば OECD 加盟国の国際データを用いて男性の家事分担と少子化の問題に取り組んだ赤川学（2004）や東アジアの国・地域を分析するなかで育児負担を典型とする男性の家事負担の分配問題を考察した瀬地山角（1996）などがある。また、男性とワークライフバランスを巡る議論は、グローバル規模での経済不況の結果、正社員の男性総数は減少し、非正規・非典型雇用形態で働く男性が増えたという雇用形態の変化や、ブラック企業、過労死、サービス残業などの近年とくに顕在化した社会問題として論じられてきた。

いずれにも〈男らしさ規範〉が主要因として通底していることが指摘されている。男性稼ぎ手モデルに顕著な〈男らしさ規範〉は、日本に特有のものだろうか。日本の〈男らしさ規範〉の内実を明らかにし、今後の男性のワークライフバランス政策を充実させるためにも、男性の意識調査に加え、実態調査が喫緊の課題として求められている。そのさい、最も有意義な方法は国際比較である。日本社会の〈男らしさ〉の特徴をより精緻に同定するためには、国際比較の視点を取り入れ、日本社会と他国の〈男らしさ規範〉における共通点と差異点を明確にすることが不可欠である。

２．研究の目的

本研究の目的は、とくに文化的要因である〈男らしさ規範〉に着目し、日本の男性のワークライフバランスに対する意識とその実態を、日米豪の比較研究から明らかにすることにある。日米豪の〈男らしさ規範〉は大きく異なるものの、グローバルな規模で急速に進む男性の非正規・非典型雇用の増大に伴う働き方の変容によって、伝統的な〈男らしさ規範〉が揺らいでいるという点で、3 カ国は共通している。本研究は、この〈男らしさ規範〉の揺らぎを研究対象とし、統計資料から非主流の働き方をしている男性の実態把握を目指すとともに、当事者へのヒアリングと質問紙調査を実施する。米豪を比較対照にし、日本の〈男らしさ規範〉の特徴を、意識と実態の両面から比較社会学の手法で析出する。それらを踏まえ、男性の働き方という視点からの男女共同参画社会の実現に向けた提言を検討する。

３．研究の方法

（1）米のマクロデータと日本のデータの比較

男性学の分野は、いまだ英語圏の議論が日本のそれよりも蓄積が厚い。男性の働き方や養育意識を含め、多様な社会調査が英語圏では展開されている。最新の国際データの収集を踏まえ、最新の議論が展開されている米と日本のマクロデータを比較し、その分析と解釈において、男性のライフワークバランスの意識と実態にいかなる共通点と差異点があるのかを同定した。

（2）豪のマクロデータと比較

男性学の分野で世界を牽引しているのは豪の研究者たちである。豪は米と文化的に共通

している部分がある一方で、〈男らしさ〉の文化的基盤という点ではやや異なる様相を呈している。日米の 2 か国間比較にとどまらず、3 点目の参照点として男性研究を世界的に牽引している豪を含めることで、より日本の〈男らしさ規範〉について多角的な記述が可能となった。

（3）現代日本の男らしさの特徴を 3 か国間比較から析出

〈男らしさ規範〉という問題関心は、米と豪では大きく異なる文脈を有する。そのなかで日本の特殊性をあぶりだす作業は、今日のわが国の喫緊の課題である少子高齢化の社会的背景を浮き彫りにすることにもつながる。マクロデータに加え現地でのインタビュー調査・質問紙調査を含め、3 か国を比較社会学（質的比較分析）の手法で分析することで、単純な比較で終わらせずに立体的に日本の特徴を析出できた。

４．研究成果

本研究は、国際比較を通して日本社会に固有の〈男らしさ規範〉を軸としたジェンダー問題を描き出すことを狙いとしていた。日本社会の〈男らしさ規範〉を問い直す本研究課題の作業をとおして、ジェンダー研究の新展開にとっても重要な示唆をもたらすことができた。具体的には、3 カ国比較の結果から次のように指摘できる。

〈男らしさ規範〉という視座から、男性のワークライフバランスを考察することで、日本において進行する喫緊の課題である（晩婚化や非婚化などを含む）少子高齢化の歴史社会学的背景を明らかにすることができた。また、〈男らしさ規範〉は、男性のライフコースを規定し、ワークライフバランスにもっとも強い影響を与える要因の 1 つであることにとどまらず、日本社会のジェンダー規範の構造的特徴を支えているもっとも主要な規範の 1 つであることが明らかとなった。

本研究はジェンダー規範の解明という課題であった。本研究課題を進めるなかで、男性の働き方がなぜ変わりにくいのかについて、その解明を目指す土台を実証的に提供することができたことにとどまらず、規範にかかわる文化的な諸側面を明らかにするとっかかりを得ることができたことも、本研究の大きな成果といえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計27件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　16件）

１．著者名 齋藤圭介	４．巻 35
２．論文標題 解題 「理論という実践」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『年報社会学論集』	６．最初と最後の頁 1－4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SAITO Keisuke	４．巻 72
２．論文標題 生殖における男性の当事者性・再考	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Japanese Sociological Review	６．最初と最後の頁 467～486
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4057/jsr.72.467	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤圭介	４．巻 (5)
２．論文標題 査読誌に掲載されやすい論文テーマとは何か	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『新社会学研究』	６．最初と最後の頁 188-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 SAITO KEISUKE	４．巻 1
２．論文標題 Unisa/Kanto Fellowship Program in Focus	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Advancing Japan-Australia Knowledge Exchange in the 21st Century Proceedings	６．最初と最後の頁 8-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 (158)
2．論文標題 テーマ部会報告概要（テーマ部会A 理論という実践）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関東社会学会ニュース	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 63(6)
2．論文標題 第12回/最終回 〈社会調査で得られる社会像〉と〈リアルな社会〉のあいだに生じる不可避のズレ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ATOMOΣ（日本原子力学会誌『アトモス』）	6．最初と最後の頁 496-496
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.63.6_496	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 (157)
2．論文標題 研究例会報告「第1回研究例会報告会 理論という実践――ジェンダー理論は社会正義を語れるか」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関東社会学会ニュース	6．最初と最後の頁 15-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 (157)
2．論文標題 テーマ部会部会要旨「テーマ部会A 理論という実践――ジェンダー理論は社会正義を語れるか」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関東社会学会ニュース	6．最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Saito Keisuke	4．巻 2020
2．論文標題 What is the Male Reproductive Experience?: From Interviews with Men Who Are Actively Engaged in Childcare	5．発行年 2020年
3．雑誌名 The Annual Review of Sociology	6．最初と最後の頁 157～168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5690/kantoh.2020.157	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 62
2．論文標題 第9回 学生にとって，社会調査の魅力とは何か	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 294～294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.62.5_294	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 62
2．論文標題 第10回 質問紙調査の魅力と落とし穴	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 401～401
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.62.7_401	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 62
2．論文標題 第11回 社会調査とプライバシーの微妙なバランス	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 606～606
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.62.10_606	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 156
2．論文標題 研究例会 理論という実践――ジェンダー理論は社会正義を語れるか（企画趣旨文）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 関東社会学会ニュース	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 28
2．論文標題 日本社会学会会員の専攻分野の〈近さ〉と〈遠さ〉――クラスター分析を用いた社会学知の構造分析（	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『年報　科学・技術・社会』	6．最初と最後の頁 47-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 61
2．論文標題 第1回 社会学者は社会を語れているのか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 425～425
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.61.5_425	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 61
2．論文標題 〈社会〉を語る二つのアプローチ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 502～502
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.61.6_502	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 61
2．論文標題 第3回〈社会〉がさきか，〈個人〉がさきか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 566～566
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.61.7_566	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 61
2．論文標題 第4回 社会学者は，〈社会〉を記述するべきか，考察するべきか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 630～630
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.61.8_630	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 61
2．論文標題 第5回 社会を外側から語るか，内側から語るか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 696～696
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.61.9_696	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 61
2．論文標題 第6回 社会学の歴史をめぐる3つ目の立場	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 748～748
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3327/jaesjb.61.10_748	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 62
2．論文標題 第7回 社会調査に協力することのメリット／デメリット	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 62
2．論文標題 第8回 国際比較調査の面白さと危うさ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan	6．最初と最後の頁 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 33
2．論文標題 男性の生殖経験とは何か――育児に積極的にかかわっている男性へのインタビュー調査から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 年報社会学論集	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 28
2．論文標題 日本社会学会会員の専攻分野の〈近さ〉と〈遠さ〉――クラスター分析を用いた社会学知の構造分析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 年報　科学・技術・社会	6．最初と最後の頁 45-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 61
2．論文標題 社会学者は社会を語れているのか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本原子力学会誌『アトモス』	6．最初と最後の頁 425
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 1
2．論文標題 〈生殖と男性〉の社会学――ジェンダー理論における平等論・再考	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東京大学大学院人文社会系研究科・博士論文	6．最初と最後の頁 1-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤圭介	4．巻 68（3）
2．論文標題 質的比較分析（QCA）と〈社会科学の方法論争〉	5．発行年 2017年
3．雑誌名 社会学評論	6．最初と最後の頁 386-403
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計24件（うち招待講演　6件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 齋藤圭介
2．発表標題 選択的中絶と男性をめぐる論点と争点
3．学会等名 国際ジェンダー学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 生殖補助技術がもたらす男性の当事者化――男性不妊と選択的中絶をめぐる論点と争点
３．学会等名 日本社会学会大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 出生前診断を経た後期中絶と男性――生殖補助技術が促す男性の当事者化とその争点
３．学会等名 NWECフォーラム2022
４．発表年 2022年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 社会調査で明らかになること／ならないこと（社会・環境部会セッション 2020年度社会・環境部会賞受賞記念講演）
３．学会等名 原子力学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 「理論という実践――ジェンダー理論は社会正義を語れるか」
３．学会等名 関東社会学会テーマ部会A
４．発表年 2021年

１．発表者名 Saito Keisuke
２．発表標題 UNISA/KANTO FELLOWSHIP PROGRAM IN FOCUS
３．学会等名 ADVANCING JAPAN-AUSTRALIA KNOWLEDGE EXCHANGE IN THE 21 ST CENTURY（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 『社会学評論』は高嶺の花か？――査読誌に投稿する執筆者の属性とその趨勢
３．学会等名 第93回日本社会学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 シンポジウム「社会学への冷笑と羨望――隣接分野からのまなざし」（司会）
３．学会等名 第93回日本社会学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 査読誌に論文を掲載するためには何が必要か
３．学会等名 第68回関東社会学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 理論という実践――ジェンダー理論は社会正義を語れるか（司会）
３．学会等名 関東社会学会 研究例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 SAITO KEISUKE
２．発表標題 AI and Digital Skills
３．学会等名 Adelaide Conference (University of South Australia, Australia)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 出生前診断に男性はいかに向き合ってきたのか
３．学会等名 IGSセミナー（お茶の水女子大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 出生前診断における夫の選択――育児に積極的にかかわっている男性へのインタビュー調査から
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 SAITO KEISUKE
２．発表標題 The Gender of Suicide: Knowledge Production, Theory and Suicidology
３．学会等名 International Workshop on Australian Sociology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 〈AIとモビリティ理論〉をめぐる新展開――オーストラリア社会学の最新動向からの提言
３．学会等名 New Development of AI and Mobility in Australia（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 査読誌に論文を掲載するためには何が必要か
３．学会等名 関東社会学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 日本社会学会会員の専攻分野の〈近さ〉と〈遠さ〉――多次元尺度構成法を用いた時系列分析
３．学会等名 関東社会学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 SAITO KEISUKE
２．発表標題 ’Assisted Reproductive Technology (ART)' and its Effects on Masculinity
３．学会等名 New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations, University South Australia.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 男性が妊娠の当事者になるとき――男性不妊治療の専門医と男性当事者へのインタビュー調査から
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 SAITO KEISUKE
２．発表標題 Qualitative Comparative Analysis and Method Controversy in the Social Sciences
３．学会等名 International Workshop on Qualitative Comparative Analysis (QCA)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 生殖の当事者とは誰か
３．学会等名 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 戦後日本の社会学者の専攻分野の重複と差異――多次元尺度構成法を用いた時系列変化に着目をして
３．学会等名 早稲田社会学会第39回例会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 決定論と誤差
３．学会等名 ソーシャルコンピテーション学会第7回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 齋藤圭介
２．発表標題 質的比較分析はどのように経験的データを扱うべきか
３．学会等名 日本社会学会第90回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 マーゴ・デメッロ（著），田中洋美（監修，翻訳），兼子歩（翻訳），齋藤圭介（翻訳），竹﨑一真（翻訳），平野邦輔（翻訳）	４．発行年 2017年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 251
３．書名 ボディ・スタディーズ―性、人種、階級、エイジング、健康/病の身体学への招待	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 "The Gender of Suicide: Knowledge Production, Theory and Suicidology " International Workshop, Gender Project at Okayama University	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 "New Development of AI and Mobility in Australia" International Workshop on Australian Sociology	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関